

## オスカー・ワイルドの喜劇にみるダンディズム

佐々井 啓

(日本女子大学家政学部)

原稿受付平成 17 年 8 月 31 日；原稿受理平成 17 年 12 月 19 日

## Oscar Wilde's Dandyism in His Comedies

Kei SASAI

*Faculty of Home Economics, Japan Women's University, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8681*

In this essay, I will explain dandyism represented in Oscar Wilde's comedies, examining the lines and photos of dandy characters and comparing three characters in his novel *The Picture of Dorian Gray*. Wilde says in his letter, 'Basil Hallward is what I think I am: Lord Henry what the world thinks to me: Dorian what I would like to be—in other ages, perhaps.' In his comedies, there are many dandies; they show 'narcissism,' 'revolt against the society and moral,' 'pursuit of modernism,' 'aesthetics of decadence' and 'voluntary spirit.' Lord Darington in *The Lady Windermere's Fan* and Lord Illingworth in *A Woman of No Importance* are decadents who revolt against society. They resemble Lord Henry. Lord Goring in *An Ideal Husband* is narcissist but he saves his friend voluntarily. He is the same as Basil who is conscious about real life. Jack and Algernon in *The Importance of Being Earnest* pursue pleasure in an imaginary life which resembles the fantastic life of eternal beauty in Dorian. As a result, Wilde wants to show his dandyism to describe many types of dandies in his comedies. These dandies, narcissists, create fashion with perfect attire. The most important dandy attire are the necktie and the buttonhole. In those days, the necktie was necessary for any man of society. The buttonhole was made of natural flowers, and was changed two or three times during the evening. Because they are so fragile, they symbolized the dandyism of Wilde.

(Received August 31, 2005; Accepted in revised form December 19, 2005)

**Keywords:** Oscar Wilde オスカー・ワイルド, the end of 19th century 19 世紀末, comedy 喜劇, dandy ダンディ, necktie ネクタイ, buttonhole ボタンホール.

## 1. はじめに

19 世紀末を代表する作家であるオスカー・ワイルドは、自らダンディを標榜し、その独特な装いで大いに注目された人物であった。ダンディズムとは、山田<sup>1)</sup>によれば 19 世紀初頭のジョージ・ブライアン・ブランメルを創始者とし、貴族階級と紳士階級からなる支配者層において、「独特の貴族趣味と風変わりな文明批判の世界に生きる人々」によって成立し、ダンディな人々の精神をあらわしたものである。ここではダンディズムは貴族制から民主制への過渡期的な現象として捉えられている。そして 19 世紀末のロンドンに再びダンディズムが成立する。すでにブルジョワ階級が経済的な実権を握り、民主化が進んだ社会にあって、ブランメルの時代とは異なる新たな思潮が登場し

た。それは世紀末芸術家、とりわけ唯美主義を唱える人々によるものであり、彼らはダンディズムの復活を唱えてブルジョワの精神主義や偽善性と立ち向かい、外見的には貴族的な服装の復活を試みたのであった。その中心的な人物がオスカー・ワイルドであり、ヴェルヴェットのコートにニー・ブリーチズを穿き、革のブーツに幅広のクラヴァットを結んだ唯美主義のスタイルで注目を集めた<sup>2)</sup>。このようなダンディとしての服装や行動によって一躍有名になったワイルドは、自らの美意識を講演や著作のなかで述べているが、それらの研究は、作品解釈などの英文学の立場からなされたものがほとんどであるが<sup>3)</sup>、当時の社会や風俗との関わりにおいて論じられたものもある<sup>4)</sup>。

すでに筆者は、ワイルドの小説である『ドリアン・

『グレイの肖像』を取り上げてダンディズムとダンディな装いについて論じた<sup>5)</sup>。そこではワイルドは3人の男性をダンディな人物として描写し、ワイルドのダンディズムについての見解が作品中にそれぞれの人物を通して述べられていることを明らかにした。さらに、先行研究を踏まえて、ダンディな装いのバックグラウンドとして「それ独自の方法での美の絶対的な現代性を主張する企て」であるダンディズムと、道徳的な悪や退廃を賛美し、偽善を嫌う自己中心的な新快楽主義が存在することを結論づけた。

またワイルドは書簡のなかで『ドリアン・グレイの肖像』に描かれた3人の男性について、「自分がこうであると考えている自分」、「世間が自分についている自分」、「新しい時代にそうなりたいと願っている自分」を創造した、と述べている<sup>6)</sup>。この3人は、「芸術家としてのワイルド」、「世間が認めるワイルド」、「美に生きる空想上のワイルド」と言い換えることができるが、順に画家のバジル・ホールワード、ヘンリー・ウォットン卿、ドリアン・グレイを指しており、それぞれがダンディな人物としてあらわされていた。

次に、ワイルドの喜劇作品の登場人物を検討した結果、それぞれの台詞や場面設定においてダンディな人物が描写されていることが明らかとなり、それらの人物の性格や衣裳についてはすでに詳細に報告した<sup>7)</sup>。また、これらの喜劇が成功した背景には、風習喜劇として当時の上流社会の風俗を十分に反映しながら、登場人物の言動や服装がダンディズムをあらわしているからであるという結論に達した。

そこで、本論では、ワイルドの喜劇4作にダンディな人物として登場しているダーリントン卿、セシル・グレアム（『ウィンダミア卿夫人の扇』）、イリングワース卿（『なんでもない女』）、ゴーリング卿（『理想の夫』）、ジャック、アルジャノン（『まじめが肝心』）を中心として取り上げ、彼らの台詞や当時の舞台写真を分析し、これまで検討されていなかった『ドリアン・グレイの肖像』の3人の男性との比較によって、ワイルドのダンディズムを明らかにしたい。

## 2. 喜劇の登場人物にみるダンディ

まず、すでに性格や服装について検討した喜劇の代表的な登場人物について、ダンディズムの定義との関わりを明らかにしてみたい。

『ウィンダミア卿夫人の扇』（1892年2月）のダーリントン卿は、ウィンダミア卿夫人を誘惑するダンディ

として描かれている<sup>8)</sup>。

**ダーリントン卿** この節うぬぼれの強い連中が大勢、さも善良振って社交界をのし歩いていますからね、悪人振って見せるほうが却って奥ゆかしく謙虚な性質に見えると思うんです。それにこれだけはいっておかなくちゃならん。もし善人らしくみせかけると、世間はたまじめにうけとる。悪人らしく見せかけるとうけとらない。

**ダーリントン卿** 善人がこの世でずいぶん害を及ぼしていると思うんですがねえ。なんといっても彼らの及ぼす最大の害は悪というものをとてつもなく重要な物にしてしまうってことです。人間を善玉と悪玉に分けるなんてばかげてますよ。人間は魅力があるか退屈かのどちらかです。ぼくは魅力的な人間の味方です。そしてあなたこそ、ウィンダミアの奥様、なんとしてもそのおひとりなんです。

ダーリントン卿は「悪人振って見せるほうが奥ゆかしい」という逆説を唱え、「善人がこの世で害を及ぼし」、「人間は魅力があるか退屈かどちらか」と言う。ここには、社会の通念として善であることに対する反抗の精神が存在し、あえて悪を正当化する退廃的なダンディズムについて述べた台詞である。ダーリントン卿は、とりわけ退廃的なダンディとしてあらわされているが、結局ウィンダミア卿夫人を誘惑することに失敗する筋書きは、この種のダンディの結末を物語っていると思われる。

『なんでもない女』（1893年4月）のイリングワース卿は、他の著作にもみられるワイルド自身の考えがあらわされている。

イリングワース卿の台詞の中から、ダンディの信条ともいえるべき部分を取り上げてみたい<sup>9)</sup>。

**ケルヴィル** 下院が常に貧民の困窮に対して大いなる同情を示してきていることは否定なさらないでしょうな。

**イリングワース卿** それが特筆すべき下院の悪徳ですな。現代の特筆すべき悪徳でもある。人は人生の喜び、美、色彩にこそ共感すべきなのだ。人生の痛みについては触れなければ触れないほどいいですよ。

ここではダンディは貴族的な生活の美的な部分にのみ存在し、多くの人々の現実の生活に触れ、それに共感すべきではない、という意見が述べられている。この部分と同じ内容が、『ドリアン・グレイの肖像』で

## オスカー・ワイルドの喜劇にみるダンディズム

はヘンリー卿の言葉として語られている<sup>10)</sup>。下院や上流階級が率先して行っている慈善事業に対して、ダンディたちは反感を抱いて「悪」と決めつけ、社会の道徳に反抗する考えがあらわされている。

このような現実生活とかけ離れた美的な生き方を示そうとするダンディは、自らの肉体を鍛える「健康」については徹底的に嫌悪感を示す<sup>9)</sup>。

アロンビー夫人　ぞっとしますわ。「健康」なんて言葉。

イリングワース卿　英語のなかで最も愚劣な言葉だね、健康についての通念はだれでもよく知っていますよ。狐のあとをギャロップで追っているイギリスの田舎紳士。

「健康」は「英語のなかで最も愚劣な言葉」であるといい、「不健康」であり「病的」なものがダンディとして美化される。『ドリアン・グレイの肖像』のヘンリー卿は、「疲れた表情」と「物憂げな声」でもって、ダンディの資質を備えていることが示されている<sup>11)</sup>。

さらにイリングワース卿は、肉体の変化に対する挑戦ともいえるべき言葉を発している<sup>12)</sup>。

イリングワース卿　年齢なんかとるつもりは毛頭ないですね。精神は老いて生まれて若くなる。それが人生の喜劇なのだ。

アロンビー夫人　そして肉体は若く生まれて老いていく。それが人生の悲劇なのね。

イリングワース卿は現実の肉体が老いていくのに対して、精神の若さが重要な問題であるといい、ダンディにとっては肉体の老化はあり得ないと主張する。肉体が老いずにいつまでも若さを保っていることは、ドリアンが若いままで年齢を重ね、代わりの肖像が年老いていくという現実離れたストーリーを思いださせる台詞である。

以上のような健康に対する嫌悪や肉体の老化の否定は、ダンディズムにおける自然に対する反逆の精神であるといえよう。

さらにイリングワース卿がジェラルドに人生論を話している場面で、次のようにいう<sup>13)</sup>。

イリングワース卿　ああ、現代的じゃないんだな、現代的であることこそ当節は唯一の価値あることなのに。きみだって現代的でありたかろうじゃないか、ジェラルド？　きみだってあるがままの人生を知りたいだろう。旧式な人生論ではぐらかされたくないだろう。そこでだ、さしあたり君のし

なくてはならないのはひたすら最高の社交界にふさわしい人間になることだ。ロンドンの晩餐会の食卓を支配できる人間なら世界を支配することができる。未来はダンディーのものだ。これから支配者になるのは洒落者なのだよ。

ダンディの条件としては現代的であること、すなわちモダニズムの追求が重要であり、そうすれば最高の社交界にふさわしい人間となってロンドンの晩餐会を支配することができるという。これはダンディズムの持つ貴族性をあらわしており、その方法を次のように述べる<sup>13)</sup>。

イリングワース卿　一流の社交界に出るには、当節、客にご馳走するか、楽しませるか、ショックを与えるかすればいい—それだけのことさ！

社交界では客をもてなし、楽しませるのは当たり前のことであるが、ダンディはさらに「ショックを与える」必要がある。これはダンディの特質であり、ワイルド自身の行動としてすでに指摘されているが<sup>14)</sup>、ワイルドはイリングワース卿の台詞のなかでダンディであるための条件やダンディとしての心構えをさまざまな角度から述べていることが理解できる。

『理想の夫』(1895年1月)のゴーリング卿は、最もワイルドに近い人物としてあらわされている<sup>15)</sup>。

(ゴーリング卿、登場。三十四歳、ただしいつももっと若いと称している。育ちのよい、無表情な顔。利口だがそう思われるのを好まない。一点非の打ちどころもないダンディながら、人からロマンティックだなどと思われたりしたら腹を立てるだろう。人生をもてあそび、世間と完璧にうまくいっている。誤解されるのが大好きである。それで有利な地点に立てるからである。)

また次のような台詞がある<sup>16)</sup>。

ゴーリング卿　そう、イギリス人ってのは自分は正しいんだと四六時中いっているような男には我慢できないが、自分は間違っていたと認める人間は大好きなのだ。そこがかれらの取柄だね。

ダンディであるゴーリング卿は他人から誤解されるのを好むことで反社会的な姿勢を示し、また自分の非を認める人間を好む点は偽善的な人々に対する抵抗を示している。また、ダンディは利口であり、ロマンティックであることを他人の目から隠そうとする点が、これらの台詞から窺われる。実際、ゴーリング卿はイリングワース卿のような冷徹なダンディではなく、人間味のあるダンディとして描かれている。そのことは、ゴー

リング卿が友人の危機を救うために奔走しながら手柄としない姿に明らかであり、そこにダンディの無償の行為をみることができる。ワイルドはその時の様子を「必死になって気を落ち着け、ダンディの陰に隠れている哲学者たる自分を示しながら」と書きで説明している<sup>17)</sup>。

『まじめが肝心』(1895年2月)では、二人の青年が登場する。ジャックは偽名を使って、田舎と都会の二重生活を楽しんでいるが、遊び人のアルジャンもまた架空の老人の世話をする話を作り上げ、そこを訪ねていくことを口実に息抜きをしている。似たような生活を送る二人ではあるが、ジャックと比較してアルジャンのほうがお洒落に気を使うダンディである。アルジャンの次の台詞からダンディの生き方を窺うことができる<sup>18)</sup>。

アルジャン 真相なんてものはめったに真実でもないし決しておもしろくもない。もし真実が明白かであってみろ、現代生活はひどく退屈なものだろうし、現代文学など絶対に存在せんぜ!

アルジャンは、「真相が明らかであれば、現代生活はひどく退屈」であるという。ダンディが退屈しないためには、虚偽に満ちた生活であったほうがよい、と解釈できる。これは、ジャックとアルジャンがそれぞれ別の自分を演じて生活を楽しんでいることを示しているといえよう。退屈をしないための新しいものの追求が、虚偽の二重生活である。ここでは真面目に生活をするという社会の通念に反する精神が強調されている。

以上のように、登場人物たちは作者であるワイルドのさまざまな側面をあらわしている。すなわち、伝記や日記などによるワイルド自身の生活から窺える、ダンディではあるが真面目な姿、世間がワイルドに対して持っているどちらかといえば悪人ぶっているイメージをあらわす姿、そしてワイルドが理想と考える、時の流れを無視した美的な生活を送る姿を、さまざまな人物の言動によって複雑に関係させながら表現していると考えられる。

### 3. ダンディの装い—ネクタイとボタンホールの飾り花

これまでみてきたダンディな男性たちは装いに凝ることでダンディとしての評価を得ていた。ダンディにとって外見は自己表現の重要な要素であり、これを抜きにしてはダンディの本質を明らかにすることはでき

ない。そこで、彼らが特に注意を払っていたネクタイとボタンホールの飾り花について、登場人物の台詞からみていきたい。

ネクタイは男子服に欠かせないものであり、当時すでにその装い方が確立していた。その様子は、『なんでもない女』の舞台写真(1893年)のイリングワース卿の姿に見ることができる。イリングワース卿は図1の右端にドレスコートに白いウェストコート、白いタイにボタンホールの花を飾って登場している。

イリングワース卿は、ネクタイとボタンホールの飾り花について次のように言う<sup>19)</sup>。

イリングワース卿 人間は当節徹底的に軽薄なものであるから軽薄の哲学を解さない。ところでジェラルド、ネクタイぐらいもう少しく結べるようにならなきゃいけないよ。ボタンホールにさす飾り花は、感覚がすべてであるが、ネクタイの基本はスタイルなのだ。ネクタイがうまく結べて初めて人生への第一歩を真剣に踏み出したことになる。

ここにみられる「ボタンホールは感覚がすべてであるが、ネクタイの結び方が大切」という台詞は、ダンディがネクタイを重要な表現手段としていることを窺わせる。ネクタイがうまく結べて初めて人生への第一歩を踏み出すということは、ネクタイが当時の社交界をあらわすものであり、基本的な約束事が社交界では大切であることを示唆していると考えられる。

次に、アルジャンがセシリーと話をしている場面に、「ジャックはネクタイの趣味がない」と言う場面がある<sup>20)</sup>。

アルジャン ジャックに僕の旅行用品を買わせてなどやるもんか。ネクタイの趣味が全然ないん



図1.『なんでもない女』, 1893年4月  
The Illustrated London News, 1893年4月29日号掲載。

## オスカー・ワイルドの喜劇にみるダンディズム

だから、

ネクタイはダンディにとって、自己を表現する大切な付属品であり、ゆえにネクタイの趣味はダンディの評価にもつながるものであった。

さらに、アルジャンンは、ジャックの装いについて次のように言う<sup>21)</sup>。

アルジャンン きみほど着替えに暇がかかって、そのくせちっとも見栄えのしない奴めめずらしい。ジャック まあ、とにかく、きみみたいにいつもめかしすぎるよりはましさ。

アルジャンン 時には少しめかしすぎるとしてもだ、その分はすごく学がありすぎること埋め合わせがついているぜ。

アルジャンンは、ジャックの着替えについて「暇がかかってちっとも見栄えがしない」といい、ジャックが「君のようにめかしすぎる overdressed よりはまし」という。しかしアルジャンンは自分の装いは「学があること overeducated で埋め合わせがついている」と反論する。

このように、まじめなジャックの装いに対してアルジャンンは流行の先端を行くダンディとして描かれているが、アルジャンンは単に外見的な装いに凝っているだけでなく、教養があるエリートであることを自ら強調している。

一方ボタンホールの飾り花は、世紀末に流行した男性のおしゃれのポイントである。1日に二、三度取り替えるが、生花であるために花屋から直接取り寄せた新鮮な花がボタンホールに飾られた。

『ウィンダミア卿夫人の扇』では、セシル・グレアムが緑のカーネーションをつけて登場している（図2

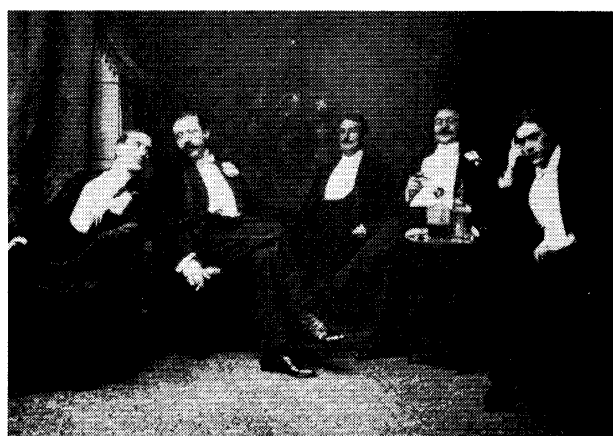


図2. 『ウィンダミア卿夫人の扇』, 1892年2月

The Mander and Mitchenson Theatre Collection, 1892年2月, V & A Museum.

左端)。初演の数日前に、ワイルドが緑のカーネーションを買うように頼み、初日にはセシル・グレアムとワイルド、さらに若い友人たちが緑のカーネーションを飾った、と伝えられている<sup>22)</sup>。

緑のカーネーションは、人工的に着色したものである。それは白いカーネーションが染められ、あるいは酸で処理されたものであり、ピンクやモーヴ、ヴァイオレットなどにも染められたという<sup>23)</sup>。

セシル・グレアムは、ダーリントン卿がウィンダミア卿夫人を「純潔で無垢なところがある」、というのに対して、次のように答える<sup>24)</sup>。

セシル・グレアム おいおい、いったい全体ぼくらが純潔や無垢をぶらさげて歩きまわってどうしようってんだい？ 入念に考え抜いたボタンホールの飾り花のほうがずっと効き目がある。

ワイルドが自分に最も近い人物としてセシルを想定していたこの台詞は、初日にセシルに緑のカーネーションをつけさせたことから窺える。いずれにしても男性にとっては「純粹や無垢」よりも「入念に考え抜いたボタンホールの飾り花」がダンディをあらわすものであった。

さらにゴーリング卿と執事のフィップスとの会話に次のような場面がある<sup>25)</sup>（図3）。

（胸飾りの花のついた夜会服姿でゴーリング卿、



図3. 『理想の夫』, 1895年1月

The Sketch, 1895年2月13日号掲載。

登場。シルクハットをかぶりインヴァネスを羽織っている。白い手袋をはめた手に、ルイ十六世ふうの杖をたずさえている。すべて流行の先端で粋をこらした服装である。一見してかれが現代生活に密着し、それを形成するばかりか、支配しているのがわかる。かれこそ思想史における最初の身なりのりっぱな哲学者なのである。)

ゴーリング卿 今夜の胸飾りの花届いているかい、フィップス？

フィップス はい、旦那様。(主人の帽子、杖、インヴァネスを受け取り、新しい胸飾りの花を盆にのせて出す)

ゴーリング卿 いささか目立つな。今のロンドンで全然何の取柄もなくせに胸飾りの花などつけている男は私くらいのもんだ。(略)

ゴーリング卿 (今挿している胸飾りの花を抜き取りながら) いいかい、「流行」とは自分が身につけているもののことだよ。流行おくれとは他人が身につけているもののことさ。(略)

ゴーリング卿 (新しい花を胸飾りにつける) 虚偽とは他人の真実にほかならない。(略)

ゴーリング卿 自己を愛することが生涯にわたるロマンスの始まりなんだよ。(略)

ゴーリング卿 (鏡に映る自分の姿を眺めながら) この飾り花が好きだなんて思うなよ、フィップス。少し老けて見える、いや、男盛りに見えるかい、え、フィップス？

これは、夜会服を着たゴーリング卿がボタンホールの飾り花を取り替えている場面である。ゴーリング卿はダンディな人物として服装に細心の注意を払っているのだが、特にボタンホールの飾り花には凝っていて、花屋に新しい飾り花を届けさせている。「何の取柄もない」のにボタンホールの飾り花をつけている、といいながら、実は「流行」は自分が作り出しているのだ、といい、さらに「自己を愛することが生涯にわたるロマンスの始まり」といって自己崇拜の意識を述べている。

さらに父のキャヴァーシャム卿がゴーリング卿に結婚を勧めたときの会話では、「ほんとに良い胸飾りをつけると、三十一と六ヶ月」<sup>26)</sup>といい、三十四歳という実際の年齢よりも若く見せるためには、ボタンホールの飾り花が最も重要なのである。

しかし、ゴーリング卿が最後にメイベルに求婚し、受け入れられたときには、もはやボタンホールの飾り

花にうるさいダンディではなく、彼女の選んだ花をうれしそうにつけている姿へと変身する<sup>27)</sup>。

ゴーリング卿、温室から戻ってくるが、大満悦の体で、だれかが作ってくれた真新しい胸飾りの花をつけている。

ここでは、ゴーリング卿の真面目で純粋な側面が、メイベルの選んだボタンホールの飾り花をつけるという行為に象徴されているといえよう。

最後に、アルジャノンがセシリーにボタンホールの花をねだっている場面を取りあげよう<sup>28)</sup> (図4)。

アルジャノン まず胸につける花をいただけないでしょうか。まず花をつけないと少しも食欲が出ないんです。

セシリー 黄色の薔薇？

アルジャノン いや、ピンクの薔薇のほうを。

セシリー どうして？

アルジャノン あなたはピンクの薔薇だもの、セシリー。

アルジャノンは、セシリーをピンクの薔薇にたとえて、それを胸につけようとしているが、女性のドレスの色に合わせた花をつけることもなされていた<sup>29)</sup>。さらに、「花をつけないと食欲がわかない」という言葉は、美食や食欲旺盛であることもダンディの条件であること<sup>30)</sup>を考えると、飾り花がなければダンディにな



図4.『まじめが肝心』, 1895年2月  
The Sketch, 1895年3月20日号掲載。

## オスカー・ワイルドの喜劇にみるダンディズム

れない、という意味に解釈できるのではないだろうか。

ワイルドは「真によく作られたボタンホールは Art と Nature との唯一の絆」であるという<sup>31)</sup>。ワイルドは人工的に着色された花を用いることが、いっそうその絆を強くしていると考えているのではないだろうか。そして、ボタンホールの飾り花は、そのはかなさゆえに、社会に対するささやかな反抗の精神を表していると思われる。

以上のように、ダンディの外見的な装いは、ネクタイとボタンホールの飾り花がダンディであるかどうかの判断の基準になるほど重要であり、これらの付属品がダンディの精神を象徴していると考えられる。

## 4. 喜劇にあらわされたダンディズム

これまでみてきた喜劇の登場人物から、ダンディの精神は次のようにまとめることができる。

まず、ダーリントン卿は、悪人ぶってみせるほうが奥ゆかしく謙虚であり、人間は魅力的か退屈かのどちらかであるという。

次に、イリングワース卿は、人生の痛みには触れないほうがいい、健康は最も愚劣なことば、年齢をとらない、ロンドンの晩餐会を支配する、社交界でご馳走するか、楽しませるか、ショックを与えること、といっている。

ゴーリング卿は、自己を愛し、快樂こそが人生であり、幸福は人を老けこませる、といい、人生をもてあそんで人に誤解されるのが好きであるという。

アルジャノンは、真相は、真実でもないしおもしろくない、真相が真実か明白かであったら、現代生活は退屈である、と述べる。ジャックもまた現実生活から逃避した二重生活を愉しんでいる。

このように喜劇にあらわされたダンディズムは、退廃的なダンディとして描かれているダーリントン卿とイリングワース卿の台詞に多く語られている。しかし、ゴーリング卿は友人の窮地を救うために奔走し、それを悟られまいと努力する無償の行為を示すダンディである。またジャックとアルジャノンは現実の生活とは異なる架空の生活を愉しむことで快樂を追っている。

したがってダンディには現実から逃避し、快樂を追ひ、現実を否定して逆説を唱える退廃的な面と、他人のために無償の努力をする面が存在していることが窺える。

これらは、「自己崇拜」、「社会の道德や自然に対する反逆」、「新しいもの（モダニズム）の追求」、「退廃

の美学」、「快樂の追求と悪の正当化」、「無償の行為」といったダンディズムの精神が喜劇の登場人物において具現化されたものである。

以上は、ワイルドが登場人物を借りて自らのダンディズムを明らかにしたといえる。世紀末のダンディとは、単に服装に凝っているだけではなく、さまざまな精神性を備えた姿であることを登場人物によって示している。そして、それはワイルド自身のダンディな側面をあらわしていると考えられる。

そして、『ドリアン・グレイの肖像』に描かれた3人の男性との関係は、次のように考えられる。

まず、バジルとして描かれた現実の芸術家としてのワイルドは、ダンディのポーズをとりながらも現実の生活に心を砕くゴーリング卿ではないだろうか。

世間がワイルドであると考えているヘンリー卿は、ダーリントン卿とイリングワース卿の退廃的な姿に重ね合わせる事ができよう。

さらにワイルドが理想とする永遠の美に生きるドリアンは、ジャックとアルジャノンの現実を超越した架空の生活と快樂の追求に共通する部分を見出すことができる。と考える。

以上の点から、ワイルドは、世間で評されている自分以外の姿を、ダンディな人物を喜劇に多数描くことによって示そうとしたのではないだろうか。したがってワイルドの喜劇に描かれた登場人物は、ワイルドのダンディズムを最も具体的に表現していると考えられる。すなわちダンディは決して表面的なものではなく、現実の社会に抵抗し、そこから逃避しながらもときには他人のために働く精神を持っている。そして、自己崇拜を身上とするダンディはすべてに完璧な装いで流行を作り出す。彼らはその装いのなかで、とりわけ社交界に注目されるためのネクタイと、生花であるボタンホールの飾り花とに心を注いだのである。ネクタイとボタンホールの飾り花は、そのはかなさゆえにワイルドのダンディズムを象徴するものであると考える。

本論文は、2002年6月、第54回日本家政学会大会における口頭発表に加筆したものである。

## 引用文献

- 1) 山田 勝：『ダンディズム 貴族趣味と近代文明批判』、日本放送出版協会、東京、21（1989）
- 2) 山田 勝：『ダンディズム 貴族趣味と近代文明批判』、日本放送出版協会、東京、69（1989）；平井 博：『オスカー・ワイルドの生涯』、松柏社、東京、40（1889）

- 3) 山田 勝：『ダンディズム 貴族趣味と近代文明批判』，日本放送出版協会，東京；山田 勝：『世紀末とダンディズム』，創元社，東京（1981）；前川祐一：『ダンディズムの世界』，晶文社，東京（1990）などは代表的な著作である。
- 4) 山田 勝（編）：『オスカー・ワイルド事典』，北星堂書店，東京（1997）など
- 5) 佐々井啓：ワイルドのダンディズム—『ドリアン・グレイの肖像』を中心に—，家政誌，**53**，1029-1035（2002）
- 6) Hart-Davis, R. (ed.): *The Letters of Oscar Wilde*, Rupert Hart-Davis Ltd. London, 352 (1962)
- 7) 佐々井啓：ワイルドの喜劇と舞台衣裳—『まじめが肝心』を中心に—，家政誌，**52**，43-51（2001）；ワイルドの喜劇と舞台衣裳—『理想の夫』を中心に—，国際服飾学会誌，**19**，14-35（2001）；ワイルドの喜劇と舞台衣裳—『ウィンダミア卿夫人の扇』を中心に—，国際服飾学会誌，**21**，4-24（2002）；ワイルドの喜劇と舞台衣裳—『なんでもない女』を中心に—，服飾美学，**35**，49-64（2002）
- 8) Wilde, O.: *Lady Windermere's Fan, The Complete Works of Oscar Wilde*, Collins London., 442 (1994), ワイルドの作品はこの版を使用し，Collins と表記（西村孝次訳：オスカー・ワイルド全集 2 巻『ウィンダミア卿夫人の扇』，青土社，東京，204（1989））
- 9) Wilde, O.: *A Woman of No Importance*, Collins, op. cit., 471（西村孝次訳：オスカー・ワイルド全集 2 巻『つまらぬ女』，東京，青土社，282（1989））
- 10) Wilde, O.: *The Picture of Dorian Grey*, Collins, 42（西村孝次訳：オスカー・ワイルド全集 1 巻『ドリアン・グレイの絵姿』，青土社，東京，60（1988））
- 11) Wilde, O.: *The Picture of Dorian Grey*, Collins, 31（西村孝次訳：『ドリアン・グレイの絵姿』，34（1988））
- 12) Wilde, O.: *A Woman of No Importance*, Collins, op. cit., 476（西村孝次訳：『つまらぬ女』，290）
- 13) Collins, *ibid.*, 493（西村孝次訳：前掲書，317）
- 14) 平井 博：前掲書，40-45
- 15) Wilde, O.: *An Ideal Husband*, Collins, *ibid.*, 521（西村孝次訳：『理想の夫』，362）
- 16) Collins, *ibid.*, 539（西村孝次訳：前掲書，389）
- 17) Collins, *ibid.*, 578（西村孝次訳：前掲書，449）
- 18) Wilde, O.: *The Importance of Being Earnest*, Collins, op. cit., 362（西村孝次訳：『まじめが肝心』，467）
- 19) Wilde, O.: *A Woman of No Importance*, op. cit., 493（西村孝次訳：『つまらぬ女』，317）
- 20) Wilde, O.: *The Importance of Being Earnest*, op. cit., 379（西村孝次訳：『まじめが肝心』，488）
- 21) *ibid.*, 388-389（西村孝次訳：前掲書，496）
- 22) Raby, P.: *Wilde's Comedies of Society*, Cambridge University Press, Cambridge, 148 (1997)
- 23) *The Queen*, March, 12, 1892
- 24) Wilde, O.: *Lady Windermere's Fan*, op. cit., 452（西村孝次訳『ウィンダミア卿夫人の扇』，250）
- 25) Wilde, O.: *An Ideal Husband*, op. cit., 553-554（西村孝次訳：『理想の夫』，412-413）
- 26) Collins, op. cit., 555-556（西村孝次訳：前掲書，416）
- 27) *ibid.*, 576（西村孝次訳：前掲書，446-447）
- 28) Wilde, O.: *The Importance of Being Earnest*, op. cit., 388-389（西村孝次訳：『まじめが肝心』，489）
- 29) Wilde, O.: *The Picture of Dorian Grey*, Collins, 143（西村孝次訳：『ドリアン・グレイの絵姿』，270）
- 30) Wilde, O.: *An Ideal Husband*, Collins, 525（西村孝次訳：『理想の夫』，368；*The Importance of Being Earnest*, Collins, 359, 363, 404-405（西村孝次訳：『まじめが肝心』，462, 469, 510-513）
- 31) Wilde, O.: *Phrases and Philosophies for the Use of the Young*, Collins, 1224